秘めたる蕾、啄むモノは……。

「う、うん、けど……」
股間を探る裕也の手が前後に揺れる。
「あ……ちょっと……んっ……あの、裕也君？」
「どうした？　早く行けよ」
前後にゆっくりと中指を筋に添わせるようにして丹念に舐めるように撫でてくる。
「あ……あの……んっ……んっ……」
股間に走る甘い感覚。最初は脇腹の辺りを触られたようなくすぐったさがあったのが、いつの間にかきゅんとお腹の奥、少し下の方が熱くなるような刺激に変わっていた。
「えと……あん……あの……んっ……」
「言わないとわからないって」
前後に撫でられるうちにどんどん下腹部が熱くなり、パンティがかすかに湿るのを感じた。
「どうした？　おしっこか？」
「ちが……う……よ。ただ……ちょっと……ね……んっ……はぁ……」
「おいおい、ふらついてね？　ちゃんとハシゴ持って。支えてやるよ……」
裕也は階段を上り、ぴったりとみなみの背後に着く。そしてもう片方の手でみなみの胸元を後ろから抱きしめる。
「きゃっ！　ちょ……裕也君ってば……」
「階段でふらふらしてっと危ないぞ？　落ち着くまで俺が支えてやるから。安心しろ」
「それはありがとうだけど……でも、大丈夫……あ……んっ……」
布越しに彼の手が左のおっぱいを鷲掴みにしてきた。
ちょっぴりどころか手に余るくらいの大きさのおっぱい。体育の時に揺れて困るのに、ブラジャーをしようとしても「まだ早い」と言われて買ってもらえない。
見られていると思うのはうぬぼれだろうと否定しつつも、たまに男子の視線が自分の体操着の胸元を見ている気がする。
「ひっ」
裕也が一段登り、より強く後ろから来た時、股間に何か触れた。大きさはよくわからないけれど立体的で時折ピクンと動く。それが自分のショートパンツの中、パンティ越しに触れてくると、なぜか鋭敏にその感覚を捉えてしまう。
体育会、フォークダンスで男子と手を繋ぐのを嫌がる級友と違ってみなみは気にせずに男子と手を繋いでいた。あまりにフケツな印象のある満は嫌な気が少ししたけれど、それでも平気だった。
未だって男子の身体の一部が触れた程度……なのにどうしてだろう。
今、みなみは胸がどきどきして、それどころかお腹の下あたりがきゅんとなり、オシリの穴をきゅっと閉めるように力んでしまう。
汗で滲むシャツ。地肌に張り付くのが嫌だった。自分は太っているからシャツが小さくな

りやすい。澪にそんな話をした時、彼女はつまらなそうに半眼を向けていた気がする。
腰の辺りが痒い。パンティの横の部分が食い込んでいるからだろう。それにさっきから下半身が汗で酷くなった気がする。まるでおしっこが漏れてしまったように股間部分がじとっとする。
早く二階に行こうと思うも裕也に支えられていて思うように身動きができない。
「ゆ、裕也君、私、もう平気だから、上がるね……」
「ああ」
意外にもすんなりと離してくれた。みなみはそっと階段を上がると、裕也もそれに合わせて登って来る。
くちゅ……。
「あ……ん」
またも股間部分に何か触れた。何か粘り気のある音もした。
「大丈夫か？」
「へいき……」
もう一段登る。少し離れて、また股間部分を突く柔らかさのある突起。
なんだろう。まさか男の人のアレ？　そんなはずがない。
男の子の生理現象については漫画や保健の授業で学んでいる。けれど、まさか裕也が自分に対してそんな気持ちを抱くはずが無い。
彼ら男子はよく自分のことをデブデブと笑っていた。逆に真奈や百合子に対してはおっぱいがでかいとかおしりがでかいとか……。
自分だって数字だけなら彼女らと同じバスト、ヒップなのにと思ったけれど、ウエストを考えると閉口するしかない。
だからこそ、彼が自分に対して勃起するはずがないと思っていた。というより、男子が自分相手にエッチな気持ちになるはずがない。体育の時の視線や岩村先生の執拗な指導は勘違い……？
そんなことを思いながら階段を登る。もう階上が見えてきており、支えてもらう理由もない。
「よいしょっと、もう大丈夫だよ。裕也君、ありがと……」
一応お礼を言い、みなみは階段を上がりきろうとする。すると裕也が急に階段を上がり始める。
二階のスペースを少しでも広く使う為なのか、階段の昇降口は床で狭められている。人一人が通る分には問題無いが、二人が通るとなるとやや狭い。
「きゃ！」
前のめりに倒れるみなみとそれに覆いかぶさる裕也。
「わり、足ひっかけた……。動ける？」
「んと……えと……あ……」

もがくうちにまたオシリにあの感触。さっきより暖かく、硬さをましている気がする。
「あの、裕也君……」
「なんだ？　歩けそう？　俺ちょっとやばいかも」
裕也が上を目指そうとするもみなみが邪魔をして通れない。みなみが抜けようとすると裕也が邪魔をする。互いに身体を密着させたまま、階段によりかかっていた。
「どうしよ、裕也君、離れられない？」
「わりい、なんかズボンかな、シャツか、とにかくひっかかって……」
なんだろうと見ると、みなみが裕也のズボンの裾を踏んでいた。
「ごめんなさい。すぐ離れるから……」
慌てて足をよけると、今度は裕也のシャツを手でつかんでしまう。
「わ……」
「あ……あぁん……」
体勢を崩してしまい、裕也がみなみに覆いかぶさるように倒れた。
むにゅっと胸元を揉まれた。それにオシリの割れ目にそってあの柔らかさを持つ固いモノが挟まってくる。
「や……あれ……ちょっと裕也君……」
パンティのクロッチ部分、そこをピンポイントで攻められる。
「ごめん、俺、しょんべん行きたいからさ……」
「あ、うん、そっか、ごめん」
今、裕也が勃起しているのはあくまでもトイレを我慢しているから。エッチな気持ちのせいじゃない。彼はそんな気持ちで自分にしがみ付いたわけじゃない。そう思いこみ、みなみはシャツを離す。
「わ……あぁん」
余計なことを考えていたせいか、手が滑る。それを裕也に握られた時、身体が硬直した。
フォークダンスの時は意識したことが無いしっかりとした感覚。すごく気恥ずかしく、離してほしいと手を振る。しかし彼は離してくれない。そのせいで身体ごと拒もうともがいてしまう。そうなると股間部分で挟んでしまったおしっこを我慢している彼のモノを刺激してしまい……。
「あ……おい、佐原……」
耳元で苦しそうな裕也の声。股間で挟んでいる彼のモノが暴れる。その動作にびっくりしてみなみも太ももを閉じてしまう。彼のモノをきゅっとしめつけると、オシリと内またでソレがむくぅっと大きく、熱くなるのを感じてしまう。
「え、え、え？　あ……ん……」
じゅくぅっとさきっぽから何かこぼれた気がする。それが自分のパンティを濡らしたとき、みなみは妙な気持ちになった。
視界がぼんやりし、うずくまるように身体を小さく丸めてしまう。おしりをちょっと彼の

ほうに突き出し、ふぅふぅと小刻みに呼吸をしていた。
「みなみ……あの……あ……」
「んっ……んぅ……ね、なんか足がっちゃったみたい。先に登れないかな？」
「ああ……わかった……」
裕也が階段を登ろうとすると、股間部分に挟まれたそれがクロッチ越しに股間をこすって来る。
ぬちゅ、じゅちゅ……ぬちゅ……。
裕也はその場で前後しつつ、何度もみなみの股間を責めてくる。
「ん、はぁ……んっ……あぁ……あっ……ね、階段……のぼれ、そう？」
「うんと……えっと、まだわかんない……」
「そっか、ごめんね。わたし……なんか高くて怖くなっちゃったのかな……。なんか、動けなくて」
階段を踏みしめる裕也。みしりと軋む音を立てる。
「んっ……んっ……んっ……」
彼の足踏みに合わせてみなみが唇を噛む。
彼女の下腹部は熱く重く、きゅんとしめるように力が入る。
身体をやんわりつつむ心地よい感覚。パンティをぬちゅっと押されると苦しくなるのに、しばらくするとぱあっと開放感と快感が身体に芽生える。
「んっ、んっ……んっ……」
指を噛み、声が漏れるのを我慢する。裕也のモノをもっと欲しくなり、自然とオシリを彼に押し付けようとしてしまう。
「あ……やべ……」
裕也のモノがみなみの股間をじゅるるっと滑った時、またしがみ付かれた。おっぱいを揉まれた。かなり強く握られたのに全然痛くない。同時に我慢したくなる圧迫感が芽生える。
「あぁん」
彼の中指が乳首を弾いた時、自分でも恥ずかしい甲高い声が出た。同時にみなみの身体に開放感が訪れる。
ふわっと浮くような感じがして、そのまま目の前が暗くなる。瞼を自然と閉じていたようだ。
「ぐ……う」
「……んっ、……んっ……え？」
裕也が苦しそうに喘ぐと、何かがびゅっと股間の辺りで漏れた。
「……え？　あ、なに？　あ……」
太ももに何か放たれた。あったかい。
「うっ、うっ……」
おっぱいを強く握る彼。その痛みがぼんやりしてそのまま眠ってしまいそうになる自分を

かろうじて繋ぎ止めていた……。

「ごめん……。俺、もらしちまったみたい……」
階段を上がったところで裕也が頭を下げていた。
「うん……」
裕也からティッシュをもらい太ももについた「彼のおしっこ」を拭きつつ、みなみは頷く。
「このこと、誰にも言わないでくれ。なんでもいうこと聞くから……」
手を合わせて土下座する裕也。
「大丈夫だよ。それよりわたしのほうこそごめんね。私がもたもたしてるから裕也君、おしっこ我慢できなかったんだよ。だから、お互いナイショだよ」
「ああ、頼む」
がばっと顔を上げる裕也。その顔をみなみは見られない。
「じゃさ、俺、残りやっとくからお前は休んでろ」
胸をどんと叩く彼は、階段を転げるように降りて行った。
「うん……」
一人残ったみなみはしばらくぼうっとしたあと、ショートパンツを引っ張る。彼のおしっこはパンティにも少しついていたようで、表面に粘り気を持ってこびりついていた。
「……」
みなみはゆっくりと立ち上がり……。

＊＊

掃除を終えた後は夕飯まで、野外アスレチックで自由時間となった。
丸太を組んで作られた簡易櫓があり、網目状に張られた縄を掴んでよじ登れる。
地面に打ち込まれた丸太の足場を飛びながら高台を目指し、ロープウェイで颯爽と流れる。
普段は目にしない遊具に徹は張り切って向かった。
「俺いちばーん！」
そう叫ぶも続く子はほとんどいない。
「待ちなさいよ。ほんとガキなんだから」
ようやく千夏がきつい目をさらに吊り上げて徹に追いつく。
「あれ？　他の奴らは？」
「みんながみんな、あんたみたいにガキじゃないんでしょ？　こんな遊具で遊んではしゃぐなんてほんと子供ね～」
「なんだよ、お前だって来てるじゃないか」

むっとして言い返すも千夏はにこやかに笑うと徹の頭をなでなでしだす。
「はいはい、よかったわね。高いとここわくないてちゅか〜。てちゅきゅんはゆうきがあってえらいえらい」
「くぅ〜!! うっせー、触んな!」
乱暴に手を払うと徹は高台に登り、ロープウェイを掴む。
山の斜面を滑ることと坂道の上にあることで、下から見た時よりずっと高く感じる。
造りは頑丈で、リフトのような形状になっている。大人でも座れる大きさでぶかぶかかかもと思うも、座ると椅子部分がへこんでフィットする。
ごくりと唾を飲み、徹はロープを掴む。このまま後ろをせっつかれては何を言われるかわからないと、スタート地点を蹴る。
しゃーっと流れるリフトは意外と早くない。その理由はロープが向こう岸とこちら側で一周できる造りになっていて、反対側のリフトが逆方向から登っていく。そのおかげでスピードが出ない。
「おお、風が気持ちいいな。それに景色もいい」
それほど早くないおかげで周囲を見る余裕がある。
竹と杉の木が生い茂る。葉の切れ目から光が差し込み眩しい。金属音が響く中、水流の音が聞こえる。近くに滝が流れているらしく、音はどんどん大きくなる。
「へえ、滝があるんだ」
来た時は見えなかったが、黒い岩肌と白い岩肌、苔で黒緑も見える小さな滝と、滝壺が見えた。
「後で行ってみよう」
そんなことを思っていると、ゴール地点に辿りつく。
「ゴールか。思ったほどじゃないな」
喉元を過ぎた恐怖を飲み込むと、徹は振り返って千夏に叫ぶ。
「おーい、早く来いよー。あっちに滝があるぞー。行ってみようぜ〜」
徹が叫ぶと千夏が両手を上げて何か叫んでいる。
「待ってよー」
彼女は怖いのかもしれない。
「大丈夫だー。かなり遅いぞ〜」
徹がそう言うとようやく千夏は椅子に座り、何度かフェイントを入れてから滑り出した。
「きゃーー!!」
黄色い悲鳴を上げつつ、滑って来る千夏。彼女は徹の指さす方をちらりとみると、もう一度大きく見る。
「ほんとだ〜! 滝があるんだ!」
ぱっと顔を輝かせる千夏はけろっとした様子で着地した。
「な、いってみようぜ」

「うん。だけど、皆も居るから 」
「皆？ 」
向こう岸を見ると他の子達が居り、祐樹がロープウェイに乗るのが見えた。
彼は目を瞑りながら必死でしがみつき、猫背で丸くなっていた。そのせいでゴールについてもしばらく気付かずに椅子に腰かけたままだった。
「ふぅ、大したことないな 」
ようやく気付いて降りると、ロープウェイが引っ張られて移動する。
「たく、目を瞑ってビビってた奴のいうことかよ。それよりそこ居ると危ないぞ。ほら、どけ…… 」
徹が向こうを見た時には既にロープウェイに乗り込んだ遠藤澪が向かって来るのが見える。
「どいてどいて〜！ 」
彼女は声を上げながら向かって来る。けれど祐樹はまだ足ががくがくしており、その動作は緩慢だった。
「危ないぞ！ 」
徹は咄嗟に彼を引っ張るが、小デブな彼を引っ張る反動で徹がゴール付近に投げ出されてしまう。
「やべ！ 」
徹はもうすぐそこに迫る澪をかわすべく、手前の空間へと落下する。見た時はそれほど高くなく、地面には落ち葉や腐葉土がある。
「きゃあああ！！ 」
澪の悲鳴を頭上に徹はしばしの落下の浮遊感を得て、どさりとしりもちをつく。
「徹！！ 」
頭上で千夏の声がした。
「大丈夫。へーきへーき 」
徹が上を見上げると千夏がハシゴを降りて来る最中だった。
「もう、危ないじゃない。心配したのよ 」
「徹〜、大丈夫！？ ごめんね。あたし、急いで乗っちゃって…… 」
澪も下りてきて徹を心配そうに見る。
「これぐらいなんてことないって。むしろロープウェイよりスリルあったな。二度はごめんだけど 」
「もう、気を付けなさいよね。見てるこっちがはらはらするわ 」
げんこつを作って徹の頭を軽く小突く千夏に、相手が違うと思いつつへらへらする。澪があまりに神妙な顔つきになるのを誤魔化したかったから……。
しばらくして麻帆と佳代、美優、満と武則がやってくる。先ほどの悲鳴に怖気づき、彼らは山道を迂回してやってきたのだった。

「こっちになにかあるの？ 」
佳代がサンバイザーをずらしながら尋ねるので徹は滝の方を指さす。
「ほら、あそこに滝があるんだ。ロープウェイから見るとすごかったぞ。
「ふうん。行って平気かしら？ 」
「わかんね。それより他の皆は？ 」
「んーと、皆暑苦しいとか虫刺されが嫌だから来ないって。裕也とミナミンは知らない。どこ行ったんだろ 」
「佐原さん居ないの？ さっきまで一緒に掃除してたのに、終わってないのかな…… 」
武則が珍しく声を上げると、戻ろうとする。
「あ、来た来た。みなみーん！ 」
後を見ると佐原みなみがロープウェイをしげしげと見ていて、美優の声を聞くと気付いて手を振り返した。
「こっちこっち！ あっちに滝があるから見にいこーよー 」
「……！！ 」
手を振りながら頷くのが見えた。
美優は佳代を引っ付き、悪だくみしてそうな表情をすると、ロープウェイを指さす。
「ロープウェイに乗ればすぐだよー！！ 」
「……わかったー！ 」
自分は下の道を歩いたくせによく言うと思いつつ、止めようとした時には既にロープウェイが走り出していた。
「わーい！ すごーい 」
比較的大柄な彼女が乗るとそれほどスピードが出ず、ちょうど良い感じで周囲を見物しながらこちら側へとたどり着いた。
「ふう。みんな、遅れてごめんね。今行くね 」
彼女は笑顔でそう言うと、ハシゴを降りて来る。
「とりあえず裕也は置いといて、みんなで滝見に行くか 」
徹は彼女がゆっくりおりるのを見ながら、滝の方を見る。
「……！？ 」
「おい、祐樹？ 」
ハシゴの方を見ていた祐樹が無言になっているので肩をドンと押す。
「あ、ああ。なんだ？ どうした？ 」
「お前だよ。ほら、行くぞ 」
「あ、ああ…… 」
彼はちらりと後を振り返った後、すぐに徹に続いた……。

杉林を抜けると切り取られて丈の短い草が生える道に出た。大きな平石が目印になっており、滝へと続いていた。
「へー、なんか涼しいね」
どどどと落ちる水が水面を打つ音が大きくなると、日差しの暑さを感じさせないぐらい涼しい風が吹いてくる。時折水しぶきが飛び散り、頬を冷たく冷やしてくれるのが気持ちいい。
滝壺は加工されていて、黒い岩で囲まれていて、下流へと続く箇所は簡易の柵がある。向こう側には手すり付の道があり、そちらからお寺に戻れるらしく案内看板がある。
「なんだ、こっちから来なくてもいいんじゃん」
謎の道を開拓して辿りついたつもりがしっかりと整備された道があると知り、少しがっかりする。
「いいじゃんいいじゃん、そんなこと。ほら、行こうよ」
千夏が手を引っ張るので、それにつられて彼も走る。
「？　あいたた……」
すると先に走っていた千夏が何かに服を引っ張られ、立ち止まる。彼女はそれを無造作に取ろうとして、慌てて指をおさえていた。
「どうかしたのか？　おい、血がでてないか？　なんだこれ、棘だらけじゃん……」
普通の木に紛れてヤマウコギが生えており、それが千夏の服に引っかかっていたのだ。
「なにこれ、とれない～」
無理に引っ張って取ろうとするものだから、まるで脱がされるようにシャツが捲り上がっていく。そうなると健康的な肌と、なだらかなラインと起伏が見え始める。
「動くなって。棘折るから待ってろ」
徹は石の上に立ち、棘の先っぽをへし折って服を取る。変に穴が開いてしまっているが、なんとか解放された。
「ありがと」
「あーあ、伸びちゃったな。あ、ダメダメ、指、血が出てるから無理に直すなって」
赤い点がぷくっと浮き上がる指を取り、口に含む。そっと舌で舐めてから軽く指で撫でる。
「後でばんそうこうもらっておけよ」
「……指、舐められた……」
よく草や木のささくれで怪我した時の応急処置のつもりだったが、千夏は指をまじまじと見つめていた。
「なんだよ、普通だろ」
昔、真奈とくさむらで探検ごっこをした時にはお互いに傷をなめ合った。そのノリで思わずしてしまったが、唾を飛ばせば汚い汚い言う女子相手に指を舐めたら何を言われるか……。
「悪かったよ。真奈にしてる感じでやっちゃったんだ。ほら、滝で手を洗えばいいだろ。早く」
「……真奈にもしてるの？」

「……昔の話だよ 」
「今だって大して変わらないじゃん。ってことは、今もそんなこと…… 」
千夏は険しい表情で問い詰めてくるので、徹も居心地が悪くなる。
「悪かったって……。ほら、ばっちいからさっさと洗いに行こうぜ 」
ばつが悪い徹は千夏の腕を引っ張り、滝の方へと急ぐ。
「あん、ちょっと待ってよ。そんな引っ張らないで 」
急ぐ徹と無理やりにでも立ち止まろうとする千夏。綱引きのようになる二人は意地になる。
いくら背が低いとはいえ男の子な徹はじりじりと千夏を引きずっていくが……。
「ちょっと、痛いってば 」
「お前がふざけるからだろ 」
「だって、石ころだらけだし歩きにくい場所なんだもん。早歩きだと危ないわ 」
さっきまで走り回っておきながら急にてのひらを返す千夏。どうもからかわれているような気がしてならない。
それなら引っ張らないと手を離すも、今度は千夏が引っ張ってくる。彼女は唇を尖らせてそっぽを向いているけれど、時折視線だけでちらりと見てくる。何か言いたげだけど、何をしてやれば気が収まるのかわからない。
普段は健康元気活発娘な千夏なのだけれど、最近はたまにイタズラ的な感じが増えてやりづらい。それは他の子にも感じられる変化……。
「ほら、気を付けてゆっくり歩きましょ 」
「へいへい 」
手を繋いで石ころの多い道を歩く二人。それでも機嫌が直ったことでほっとする。
「ほら、あれ、見て 」
「ん？ 」
千夏の指さす方には珍しい鳥が居り、声を上げたせいで羽ばたいて行ってしまう。
「あーあ 」
「お、向こうにも居るぞ 」
目を凝らすと別の木にも一羽見えた。
「珍しいね。なんだろ 」
指をさす先から再び赤い滴りが滲む。
「あ…… 」
千夏は反射的に指先をぺロッと舐めていた。
「おいおい 」
「何よ？ 何か文句あるわけ？ 」
「いや、別にいいけどさ 」
結局自分も指を舐めるんじゃないかと言いたいけれど、それをぐっと飲みこみ、道に戻る。
口喧嘩で女に勝てるはずがないのは父と母を見ていればわかるのだから。

「さてと、滝を見に行きましょっか 」
千夏は徹を引っ張り、ずんずんと進んで行く。時折何か考える様子で指を舐めていたけれど……。

滝壺の近くを道なりに歩くと、滝の裏側へ続く細い道があった。
滝の勢いは少し痛い程度だが、当然濡れてしまう。小柄な徹でも濡れずに通ることは難しく、今一歩のところで躊躇する。
奥からは冷たい風が吹いて来て、薄暗くて少し不気味だった。
「行く？ 」
千夏が滝の勢いを間近で見ておじけづいたのか、引き気味に徹を見る。
「今びしょ濡れだと滝で遊んでたことばれるよな。そしたら怒られたりしないかな？ 」
「うーん。罰として座禅五時間とか言われたらやだな…… 」
「だな。戻ろうぜ 」
「うん…… 」
徹がそう言うと千夏も回れ右をする。皆来た道を引き返すことは残念そうだったが、間近で滝を見れたのだからと戻っていった。
「きゃっ…… 」
そんなおり、狭くて歩きにくい足場のせいで澪が転んでしまい、そのまま滝壺にどぼん……。
「きゃ……あっぷあっぷ…… 」
「ちょっと澪？ 大丈夫？ 徹、どうしよ。溺れちゃうよ 」
「溺れるって……どこで？ 」
「どこでって、澪が…… 」
妙に冷静な徹にいらいらしつつ、よくよく見るとそこは足がつくようで、転んだ彼女の膝が見えた。だが当人は混乱しているらしく、ばしゃばしゃと水面を叩く。
「しょうがないな…… 」
徹は水面に降りると、澪を背後から抱えると、持ち上げる。小柄な徹でも女の子一人抱え上げる程度はわけなく、見栄も手伝ってなんとか彼女を岩場へ戻すことができた。
「ああん、溺れると思ったよー、徹ぅ～何度もごめん。ありがと 」
まるで九死に一生を得たかのような彼女は涙声になりつつ、徹に頭を下げる。
普段はお転婆な澪だけれど、さすがに反省したらしくしおらしい。
「……言いにくいけどよ、そこ、足がつくんだわ 」
「え？ 」
「ほら…… 」
背の低い徹が膝を少し超えた程度にしか水嵩が無い。

「嘘　」
そして聞こえる美優の楽しそうな笑い。
「あはは、澪ったらおっかしい。足つくのに溺れる溺れる～ってさ、あはは　」
遠慮なしに笑う美優に澪は泣き顔から真っ赤になる。
「うっさいうっさい！　うう～、もう、全部徹のせいなんだから～！　へくち！　」
さっきの季節とはいえ全身びしょ濡れでは寒い。さらに肌着が張りついて気持ち悪い。
「あたし、部屋に戻って服乾かしてくる……　」
澪がそう言うとそろそろ探検ごっこに飽きた美優も「あたしも部屋もどろーっと　」と言い佳代を引っ張る。
「じゃあ、私は澪ちゃんにタオル持ってくるね　」
みなみは本堂の方へと足早に戻る。
「ああ、俺も少し汗かいたから本堂でタオル借りてもらうかな　」
佑樹もそう言うとみなみを追いかけて戻って行った。
「おい、祐樹……ったく、なんだあいつ？　」
「じゃあ、僕も戻ろう。ここやぶ蚊が多いし、やんなっちゃうぜ。武則、戻るぞ　」
「え？　あ、うん　」
みんな本堂に戻ってしまい、残された三人はどうしようと顔を見合わせる。
「どうする？　徹　」
徹は千夏の方を見ていた。麻帆の方をみると先ほどのことを思いだしてしまいそうで気恥ずかしい。
「俺はもう少しぶらぶらしてるよ　」
「ふうん。じゃああたしも　」
「いいよ。俺は一人でいるから、お前らは部屋に戻ってろよ　」
先ほどのこともあり、なんとなく麻帆と一緒に居たくない。徹は千夏に彼女を連れて行ってもらおうと足早に裏道の方へ行った。
「ちょっと待ちなさいよ、徹！　」
追いかけて来るけれど、運動神経なら自分の方が上。徹はアスレチックを通りぬけながら千夏達をまこうとした……。

＋＋

ハシゴを降りてきたみなみを祐樹は下から眺めていた。
ひらりと捲れたショートパンツの裾。大きな丸みのあるオシリがちらりと見えるも、それを包む布地が無い。最初、白いパンツなのかと勘違いしたが、そうではない。もともと色白な彼女の肌の色だ。よくよく目を凝らしてみると、縄梯子をよちよち降りる彼女がパンティを穿いていないことが分かった。

どういう理由でそうなったのかはわからない。とりあえず彼女の部屋のある梅の蔵へと先回りしてみると、理由が分かった。

二階の窓枠の端っこに見えた雑巾のようなもの。それはピンクの布、広げると三角で何かを可愛らしく包める形状をしていた。

――なんであいつパンティ穿いてないんだよ。替えないのか？

佑樹はしばらくパンティを見つめるとポケットにねじ込み、美優達が来る前に急いで梅の蔵を後にした……。

＋＋

三軒寺に伝わる昔話。

鬼瓦村で日照りが続いた時のことだった。

二軒の滝が細り、一軒沼が干上がり、井戸が枯れ始めた。

その間も容赦なくさす日差しで田んぼも畑も干上がり、稀に見る凶作となった。

村人たちは困り果て、三軒寺の住職に何か良い知恵が無いかと尋ねたそうだ。

とはいえ住職にどうにかできることでもなく、暑さに唸っていた。

そんなある夜のことだった。

普段は寝苦しい夜だというのに、その日は涼しい風が吹いていた。

新月の夜で街灯も無い時代、少し先すら見えないというのに、村人たちは村を歩く人影を見た。

白装束に身を包んだ人影が青白い火をともした行燈を手に、一軒沼へと向かうのが見えた。

その光景に異常を感じた村人たちは、何か物の怪を疑い、尾けることにした。

人影はそのまま四軒岬へ登ると、行燈を置き、釣っていた竿を地面に突き立てる。

すると竿で突かれた地面が滲み、じわじわと広がると、ぴゅっと水が出る。

村人たちはその光景におおっと声を上げてしまう。待ちわびた水なのだから我慢ができず、尋常ではないソレを気にせず水を手にしようと歩み寄った。

水はどんどん溢れ、四軒岬から滝のように落ちると、川へと降り注いだ。

川は干上がり底の粘土質の土が割れていたが、四軒岬から降り注ぐ水を吸うと、すぐに溜まり始め、徐々に村の田畑へと流れて行く。

「おお。まさかこんな奇跡が起きるとは……。あんた、神さまの使いか……」

村人たちは異質な人影にひれ伏すと拝みこむ。

「わしはこの岬に住むモノである。おんしらが干乾びるのを見るに忍びなく、こうしてやってきた」

「ありがたや、ありがたや」

「じゃが、わしの神通力をもってしてもこの村を湿らせるほどには至らない。水を呼び込むのは骨が折れ、精気が削がれる」

「そんな、では、村は……、貴方様も……？」

「わしの滋養のためにいくつか用立てよ」

「はい、なんなりと」

「山で採れたものを馳走せよ」

「わかりました」

「酒を用意せよ」

「わかりました」

「穢れの無い女を用意せよ。わしと同じ装束に包み、身体を清めてから参らせよ 」
「わかりました 」
「それら全てを輿に乗せ、四軒岬のここへ運ぶのじゃ 」
「ははあ…… 」
ひれ伏した村人達は頭を地面に擦り付ける。

そこで目が覚めた。
朝だというのに外が暗く、なにか大げさな音がそこかしこから響く。
なんだろうと外を見ると、一軒さきも見えないくらいの大雨が降っており、田んぼも畑も川も井戸も潤っていた。
「やったぞ。雨だ。雨が降ったぞ！ 」
村人たちは手を叩き大層喜んでいた……。

次の日、雨が止んだところで村人たちは奇妙な夢のことを話していた。
皆が白装束の青白い行燈を持った男を見たという。四軒岬から雨を降らせ、供え物を用意せよと言った。

村人たちは気味が悪くなりつつ、供え物の準備を始める。
マタギのタロウベエがごぼうに大根、ニンジン、自然薯を掘り出して、ニワトリを絞めて料理の下ごしらえをする。
三軒寺の倉庫で保存していた神酒をヒョウタンに移し輿に乗せる。
穢れを知らないおぼこは美人だが嫁き遅れのサンノベの長女が選ばれた。
サンノベの親父は娘を送り出すことをしぶしぶ承知し、輿が四軒岬へ行く日は深酒をかっくらって寝てしまったそうだ。

あくる日、村の若者のジロウタが輿の様子を気にして四軒岬へ登ったそうな。
そこで見たのは食い散らかされた料理と散乱する輿の破片。それらは燃やされたのか一部が黒く焦げており、煤の匂いが漂っていた。
サンノベの長女はどうなったのかと周囲を探すと、手つかずの自然薯と彼女が着ていた装束が泥だらけで捨てられていた。
長女の姿こそ見えなかったが、御馳走が食い散らかされ、破壊された輿を見ては無事と思えない……。
手つかずの自然薯を不思議に思って拾ってみると、くにゃりと柔らかい感触のモノがあった。はて、なんだろうと首を傾げてよく見ると、それはイモではなく長女の白い手だった。
血の気が無い腕は真青に白く、あの夜の夢に出てきた男のようだった。
ジロウタは慌てて村に帰ってきたが、浮かれた村人たちに惨状を伝えようとしたが、みん

な酔っぱらって話の半分も聞いてくれなかった。
降り続く雨と獣によって痕跡はなくなり、しばらくほらふきじろうたと呼ばれたそうな……。

その年は水に恵まれ、ジロウタも口外せずに居たおかげで滞りなく翌年を迎えることができた。
しかし、次の年も日照りが続き、田畑、井戸、川、沼と干上がってしまった。
村人はあの白装束を待ちつつ、まんじりと夜を過ごしていた。
そして再びあの夢を見た。次のはやはりあの大雨で、村に潤いが戻る。
タロウベエが山で野菜や動物をとりに行き、寺から神酒をもらって準備をする。
そしておぼこを選ぶこととなり、サンノベの次女の名が挙がった。
姉様が奉公にいっているから怖くないと頷く次女に村人たちはほっと胸をなでおろした。
しかし、ジロウタは違った。
けして奉公に出たように見えない惨状を知るジロウタは、次女にこっそりと自分が覗き見したことを告げた。
次女は真青になり涙を流してしまう。
長女の惨たらしい結末と自分の未来。もし逃げたとしたら、村はどうなるのだろう。
干上がるのか、それとも激しい雨に流されてしまうかもしれない。
さめざめと涙する次女に、ジロウタは提案をした。

その晩、次女は身を清めると言い、水浴びの出来る離れの小屋へと向かった。
小屋の蝶番を外して口笛を吹き、ジロウタを呼び込むと、そのまま一夜を過ごした。

あくる日、輿に乗せられた次女は四軒岬に運ばれた。
村人たちは村の安泰を期待し、次女を笑顔で送ると村に戻った。

夜、次女は震えながら輿の中に居た。
月が雲に隠れ、辺りが急に暗くなる。
夏に似つかわしくない冷たい風が吹いた。
青白い行燈が輿から見えた。
いよいよあの男がやってくると思うと恐怖におののき、次女は震えて声も出せなかった。
「……一軒沼より這いいでて、二軒川を飲みほして、三軒山をおのぼりて、四軒岬にアメフラシ……」
夜の岬に似つかわしくない囃子が聞こえてくる。

「……自然薯齧って精を付け、神酒を含んで酔い笑い、おぼこを丸呑み気を宿す……」

だんだんと近づく声。大きくなる影。どこからともなく聞こえる太鼓の音。次女は耳を塞ぐも、その音は胸にどしんどしんと響く。

「む……」

それが急に止む。

「血の臭い……」

地面をじりっと踏みしめる音がする。

それは輿を遠巻きにし、後ずさっているようだった。

「……穢れを知らぬおぼじゃろか？　なまぐさ、なまなか、なまはんか……。土とも鉄とも鼻曲がる……。なまらなおんなはけがれなる……」

遠巻きになる声。青白い行燈が消え、月の灯りも無く周囲は真っ暗になる。

シンと静まり返り、不自然な冷たい風が無くなり、蒸し暑さが戻って来る。

周囲からは何の気配も感じない。

次女は助かったのだろうかと思い、目を開ける。

暗い輿、障子の外に月明かりが見えた。

ほっと息を着くと、急に息苦しさを感じてしまう。

無理も無い話だ。もう長い間、狭い輿の中に閉じこもっていたのだから。

次女は何も起こらないことに安堵し、障子を開けて外の空気を吸おうと顔を出した……。

「貴様！　おぼこじゃないな！　村人め！　わしを騙したな！　あばずれめ！　貴様を引きちぎり、頭から喰らうてやろうか！」

次の瞬間、青白い顔の男が障子を開け、ぎょろっと見開いた両の瞳で次女の眼前、鼻が触れる距離に現れた。

赤黒い唇からはお歯黒で真っ黒になった歯を見せ、長くとがった舌を見せつける。

眉は無く、眉間の辺りに黒い点が一つ。

男なのかどうかもわからないそれは暗がりの中、甲高い声で叫ぶ。同時に太鼓がどこどこ早鐘のように叩かれ、周囲が真っ赤な炎に囲まれる。

次女は驚き両手で頬を庇う。
「その首を噛みちぎり、生き血を飲み干してやる。生首をねじ切り、百舌鳥の贄のように木々に刺してやる！」
鋭い爪を見せつけ、牙を見せ、折った枝の切っ先を振りかぶる。
次女は口をぱくぱくさせ、目を見開き、それの奇行を見つめていた。
しばらくしてふっと意識が途切れると、そのまま輿の中で倒れてしまった……。

次の日、ジロウタが次女を心配して四軒岬へ行くと、輿を見つけた。
自然薯が折れており、とろろで滑ったのか地面が抉れていた。
輿がぐらりと揺れるのを見て、ジロウタが次女が居ると思い中を見る。
「……」
そこには半眼、涎を垂らした次女が居た。
髪は白髪が混ざり、口元がひくひくと痙攣し、尿を漏らして手を小刻みに震わせている。
酷く怯えたようで目はきょろきょろと周囲を見回し、ジロウタを見るとわっと大きな声を上げてうしろに倒れた。

ジロウタは次女を背負うと大急ぎで村に戻った。
皆、未だ降る様子の無い空を見ながら雨を待っていた。
そこへ供え物とされた次女を背負ったジロウタが戻ってきたのを見て、驚いた。
次女の様子もジロウタの焦って要領を得ない早口にも面食らい、ひとまず三軒寺の住職のところへ相談に行った。

次女が青行燈の機嫌を損ね、供物として相応しく無かったのだろう。それで青行燈の怒りに触れ、恐怖で気が触れた。前の年の長女も青行燈に食い殺されていた。
息を切れ切れにして語るジロウタの話を聞き、住職はそう解釈した。
「となると和尚、雨が降らないのはそのせいけ？」
「んだば、また別のおぼこの女をよこさないといけないのか？」
「んでも、あとはもうわらししかおらんべ」
村の妙齢の女性はほとんどが嫁いでおり、おぼこの女となると、赤飯を炊くに早い子供しかいない。
子供を奉公に出すのであればまだしも、食い殺されるとなると頷くこともできない。
お前の子を出せ、いやいや、そっちの子の方が、あいつのところの娘っ子はそろそろ赤飯を炊くころじゃろ、まだまだうちはしょんべんくさいガキじゃ……。
喧々諤々の話し合いは夜を待ち、やがて月が出る頃になると、一人が帰り、また一人が帰る。
住職は困り果て、本堂で夜遅くまでどうした者かと考えを巡らせる。

すると、ふとあの冷たい風が吹いてくるのを感じた。
ろうそくの火が消え、外に月も無いのに影が障子にう つる。
また青行燈かとその影に向かって読経を唱える。
「無駄じゃ無駄じゃ。おんしらずどもの経など、カエルや虫の鳴き声じゃわい……」
けらけらと嘲笑う青行燈の声に、住職は数珠を握りしめ、気圧されながら立ち上がる。
「確かにわしら村のもんはおんしの降らせた雨で潤った。じゃが、その為に生娘を捧げて、おんしに食わせるわけにゃーいかん」
「がはははは……。ならばそのまま干からびて死ぬか？　互いに喉元食いちぎり、生き血で喉を潤すか？　沼は汚泥で腐り果て、滝は枯れ果て音知らず、山はほうぼう草ぼうぼう、四軒岬に列を成す。我よ我さき飛び降りて、作る河川は死屍累々……」
不吉な言葉を並べ立てる青行燈に住職はいよいよ物の怪であると断じ、一矢報いよと障子を開けた。
そこには何も無く、ただ天を突くげらげらと高笑いが響いた。
「がはははは……。ならば三日後三日月までに捧げなければ、おぼこを根こそぎ喰らい つくしてやろう……、がはははは……」

住職は本堂で目覚めると、再び村人達が訪れたので通した。
皆、一様に不安そうな顔をしていた。今朝見た夢を皆も見たのだろう。
「住職、やっぱり今からでも娘っ子を供えるしかねえんかな……」
昨日の今日、夢のせいで弱気になってしまった村人たちは、娘を差し出しても助かりたい一心が見て取れた。
「うーむ。そうじゃのう……。これ、ジロウタ」
「はい、なんです住職」
「お主と話がしたい。こっちへ来い」
住職はジロウタを呼ぶと、隣の部屋で問い詰めた。
「おんし、何か隠しておるな？」
「ははあ……お見通しでしたか……。すみません、実は次女があまりに怖がるので、話を聞いて……」
「まったく、そんなことだろうと思ったわい。しかし、今はそれを言い合ってる場合ではなかろう。青行燈は化け物じゃ。何か対策を立てないといかん」
「へえ、なにかありますかい？」
ジロウタはしばらく考えて、捧げものを手つかずのものを思いだす。
「そういえば、自然薯のイモが苦手みたいですよ？　滑ってころんで、手つかずでした」
「そうか、うむ。ならばこうしよう。青行燈はおなごを狙う気じゃろう。じゃから、まだ小さいわらしは男の子の恰好をさせるのじゃ」
「男の恰好ですか？」

「うむ。ふんどしでもさせておこう。股には奴の苦手な自然薯でも挟ませておけ 」
「はあ、さすが住職様じゃ、こりゃ名案ですば 」
ジ ロウタは早速村人達に青行燈から女子供を守る手立てを話し伝える。
村人たちは女の子を脱がすと股に自然薯 いもを挟ませ、ふんどしを締めさせた。
それから三日後の夜までの間、男の子のように扱 った。

やがて三日月の夜が来た。
恐怖に震える子供たちをお寺 の蔵に隠した。
住職とジ ロウタは寺 の周りを警戒しながら、夜が明けるのを待 つ。
そして月が雲に隠れた時、冷たい風と青白い光が見えた。
「出たな、青行燈！ 成敗してくれる！ 」
ジ ロウタは鍬を片手に行燈目掛けて殴り掛かる。だが、鍬は空を切り、そのまま足を滑らせて枯れた 一軒沼 へと落ちて行 った。
住職は全く手の出しようのない青行燈に語り掛ける。
「おい、青行燈よ。残念じゃが、もうこの村のおぼこはいないぞ。居るのは男 のガキだけじゃ 」
「がははははは……、それはおかしいことを言う。そこの蔵からおぼこの匂 いがするではないか？ がははは……。それで隠した つもりとは片腹痛 い…… 」
青行燈は笑いながら蔵 へ行き、門で閉じられたはず の門をガ コンと開く。
蔵ではふんどし姿の子が震えていた。
「はっはっは、まっことかわいいおぼこどもめ……。なあに、怖がることはない。わしが順に喰ら ってやろう 」
青行燈は舌なめずりをしながら 一人目の子に手を伸ばす。
「あたいは男だ……。おとこだからちんぽこがあるだろ。見えないのか！ 」
その子は精 いっぱい声を上げ、膨れたふんどしの前を見せ つける。
「なんじゃと、おんしはおぼこじゃないじゃろか……！ 」
青行燈は驚き つつ、膨れたふんどしに手を伸ばす。そしてふんどしに隠れたきゅうりをぐりぐり弄る。
「なんじゃ！ おんしは マラか！ 」
青行燈は酷く腹を立て、別の子を見る 」
「あたいも男よ。ほら、こんなにり っぱな マラがある 」
なすびを隠した子が膨れた股間を見せ つける。
「むむむ、これはたまらん。おなごのように乳があるじゃろて、まさか男のガキじゃろか……！ 」
よたよたとうろたえる青行燈は他の子の股間も見るが、どの子も自然薯を隠している。
青行燈はそれをす ったとろろで滑り、何度も腰をぶ つけては頭もぶ つけ、ふらふらしだす。

「どうやら坊主の言うとおりか。いったいおなごはどこじゃろか……。穢れぬおぼこはどこじゃろか……」

よろよろと蔵を出る青行燈に住職がほっとした様子で声を掛ける。

「言ったじゃろう。お主を恐れておなごは皆村を出てしまったのじゃ。今頃山を越えては麓を去り、遠くの村にいるじゃろて。おぼこが欲しいならば追いかければ良いじゃろ。おんしも物の怪ならばすぐ追いつくじゃろ」

「ぐぬぬぬ……これは畜生、悔しいじゃろう。ならば山を越え、麓に降りて遠くの村へ参らん。おぼこを必ず喰らってやるわ……」

そう言うと青行燈は飛び出して山を降りて行った。

その様子を見て住職は胸をなで下ろす。蔵では安心から急に泣き出す子達の声が響き渡る。

あくる日、村に待望の雨が降った。

助かった子供たちと天の恵みで村は大いに賑わう。

やはり青行燈は化け物だ。日照りにかこつけて子を喰らう妖怪だったのだ。そう口々に呟いた。

住職もそう思い、沼がうるおい、滝が流れるのを見て、岬に登った。

すると青行燈を釣っていた竿が突き刺さっているのを見た。

地面には赤黒いシミがあり、周囲には焦げた木片と自然薯の皮、それに青白い何かがあった。

よくよく見るとそれは人の腕の一部で骨が見えていた。

ひっと叫ぶとその場にしゃがみ込む。

どこかで青行燈の笑い声が聞こえたような気がしたが、それは土砂降りの雨の音を聞き間違えたのか……。

長女を殺され、次女を狂気にさせたサンノベが三女だけは守りたいと、家に隠していたのだ。

あてにならない住職のふんどしの案などに耳を貸さずに納屋に隠していたが、どこからともなく青行燈が三女の臭いを嗅ぎつけ、納屋を燃やすと三女の首、肩、腹に喰らいつき、岬の方へと去っていった。

父母はそれを追おうとしたが、供え物のお代か土砂降りが行く手を遮った。

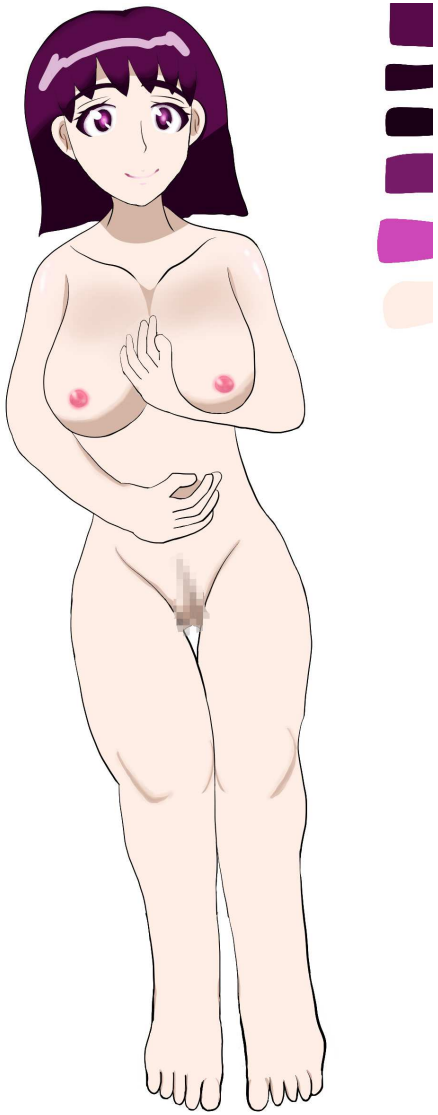
父母を呼ぶ三女の声も掻き消え、村人に助けを呼ぼうにも皆雨の恵みにそれどころではなかった。

この雨がサンノベの姉妹のおかげと知るや、村では姉妹の霊を慰める供養塔を四軒岬の麓に立てた。

四軒岬はその後の大雨で地盤が緩み、大きな地震が起きて崩れて無くなった。

今も強い日差しで雨が降らない日が続くと、青行燈が来ると言われ、女の子をふんどし一

丁の恰好をさせ、ふんどしの中に自然薯を入れて誤魔化すのだという。
そうしないと青行燈があらわれ、首と耳、胸を噛まれると言われている……。



「……という話が、この三軒寺に伝わっておるんじゃ。どじゃ？　怖いか？　がははは」
夕飯を終えて風呂までの間、本堂では和尚による怪談が語られていた。
話に聞き入った子達はぶるぶる震え、互いに身体を寄せ合っている。
怪談話が苦手というほどでもない徹は話半分に聞いていた。隣では千夏が小声で怖いと呟きながら寄り添っていることが意外だった。
「おちつけよ。ただの作り話じゃん」
「だって、怖いじゃない」
「っていうかさ、お前みたいな男女ならふんどしなくたって青行燈におそわれねーよ」
にやりと笑ってからかう徹に千夏はむっとし、拳を上げる。
「いったな！　このやろー！」
「はは、おっかねーな。あおあんどーん、こいつこれでも女なんですよー！」
本堂を駆け出し、廊下へ向かう徹。千夏もそれを追いかける。
「徹たち、元気だね……」
すっかり怪談で震えきってしまった澪は麻帆にすがり、よろよろと立ち上がるのがやっとだった。
「青行燈なんてたいしたことないだろ。俺は全然こわくねーよ」
裕也は胸を張ってそう言いきる。もともと女の子を狙う怪異ということもあり、彼は強気でそんなことを嘯いていた。
「どうかしら。あんたみたいな根性無しじゃ頼り無くて」
芽衣が半眼で裕也を睨み、ため息をつく。
「あーん？　ならお前はふんどしの中にきゅうりでもなすびでも居れてろよな」
「なんですって！　このヘンタイ！」
真っ赤になって息巻く芽衣と、それを宥めるみなみ。美優は怪談を真に受け、自然薯が何か佳代に尋ねていた……。

＊＊

「さてと、風呂いくか……」
千夏との鬼ごっこを終えた徹は、一度蔵に戻ると着替えとタオルを手に風呂場へ向かった。
本堂では満と武則がテレビを見ていた。満が毎週欠かさずに見ている番組らしく、武則はそれに付き合わされているのだろう。
蔵へ戻ると肌寒く、光も差さないから薄暗い。怪談を聞いた後だと少し身震いするぐらいには怖くなるのも事実だった。
徹はぶるぶると顔を振ると、空威張りにタオルを振り回し、脱衣所の戸に手を掛ける。
がらりと開くと、そこには既に女子が数人おり、皆白い布を腰回りに巻いていた。

「きゃー！　徹のすけべー！」
「え、え、ここって男湯じゃないの！」
「っていうか、早くでてけー！　このすけべー！」
金切り声の悲鳴を受けて、徹は追い返される。
急いで扉を閉めて一息つく。あの白い布は何だろう。まさか例の怪談のふんどしでも巻いているのかと思うと、少し可笑しかった。
「あ？　なにしてんだ徹」
すると裕也がやってきた。彼も風呂に入るつもりだったらしく、タオルを片手にやって来る。
「間違って女子のほうに入っちゃったんだよ」
「マジか、上手いこと考えるなあ。俺も覗いてみよう」
裕也はにやにやしながら扉に近づこうとする。
「やめとけよ。アイツラの裸なんて見たってつまんねーだろ」
「そうか？　まあ、今野みたいにおっぱいでかい奴もいないもんな。徹はいいよな。あいつのおっぱい見放題だろ？」
「なんであいつの名前が出るんだよ。っていうか、見放題だってみたかねーよ」
「ふーん。そうかいそうかい」
から返事で扉を見ようとする裕也にいらいらしつつ、一応は止めようと声を掛けようとする。
「おや、どうした？」
和尚さんが風呂から出てきたらしく、手ぬぐいを持ちながら隣の脱衣所から出てくる。
「和尚さん。俺ら風呂入ろうと思ったんですけど間違って女子の方に入ろうとしちゃって」
「ははは。まだまだ色気づくには早いじゃろて？　まあ、わしが入っちょるとあれやから急いで出たけんどな」
「？　どういう意味です？」
てっきり住職だから一番風呂なのだろうと思っていたが、どうも違うらしい。
「はっはっは、まあそう固く考えるほどでもないぞ。どうせ……」
和尚さんは愉快そうに笑うと廊下を行ってしまった。
「なんだろ？」
徹は少し気になったけれど、今にも女子脱衣所を覗こうとする裕也を止める為に彼を引っ張っていった。